

親の環境負荷削減行為が子どもに与える影響

The Effect for Children, Influenced by Parents' Activities of Reducing Damage toward Environment

奥土居 帥心

Suishin Okudo

This study provides the influences that the environmental activity of the parent gives to a child. How will the reducing environmental impacts of parent behavior affect the young children who still don't have a concept of the environment? I had made the eco-test for children from age 4 to 8 years and send out questionnaires to their parents.

As a result, the more parent interested in the saving energy such as "turn off the lights in the room are not using," "Do not leave the television on," "Turn off the main electrical appliances, standby power saving", the more children got the high scores. Through this study, two things are proven. First, children can learn to watch what the parent do to make an environmentally friendly place to live. Second, environmental education is good for children to get the knowledge. These are just a few of the things that we can do. However, I can say that the act to reduce the environmental impact of the parent can greatly help to make an environment that would be around for years to come for everyone to happy.

キーワード：地球環境、環境教育、幼児環境教育、共生、環境保護、持続可能な社会

Key Words : Global Environment, Environmental Education, Early Childhood Environmental Education, Symbiosis, Environmental Protection, Sustainable Society

目次

1. 序
2. 環境教育の研究の現状
3. 親の行動と子供の環境知識
4. アンケート調査と分析
5. 結論
6. おわりに

1. 序

1971年に環境庁が発足し、翌年「公害白書」から「環境白書」へと名称が変更された。日本が公害教育から環境教育に転換したのは、1975年に小・中学校の環境教育を推進するために環境教育の充実発展に取り組んでいる全国小中学校教職員による

研究団体の名称を全国・小中学校公害対策研究会から全国・小中学校環境教育研究会に名称を変更した時点であろう。

公害は局所的な問題であり、被害者と加害者の関係も明確になっており、学校現場では取り組み易い課題であった。しかし、環境問題は大気・水質・土壌などの汚染は、国境や海洋を越え地球規模に広がりをもっている。教育現場においては、捉えどころが難しく授業の設計が教師に任せられるため、教師の力量によって教育の質にばらつきが出ている。

札幌市では環境教育基本方針において次のように指摘している。

●教員の環境教育への意識

「教員によって環境に対する意識は様々であり、

学校間で環境教育の内容、充実度に違いがあるのが現状です。また、主要な科目の教育的効果が優先されがちです。教員は、自らが環境に配慮した行動を実践し、意識を高めていくとともに、環境教育を行う指導者となることが求められます。』

●環境教育に必要な指導用資料や情報

「教員が環境教育を行う時は、環境副教材などを使っていますが、足りない情報についてはインターネットなどで入手しています。しかし、インターネット上には情報が氾濫しており、欲しい資料や情報を見つけ出すのに苦労します。そのため、情報を一元化するなど、使いやすい情報の発信が求められています。』

教育現場がそのような状況の中、異常気象などの影響が顕著になり始め、人々の環境意識が環境教育よりもはるかに先を進んでいる。いまやりサイクルは当たり前で、ゴミの分別やマイバック・マイ箸などのReduceの意識などが定着しつつある。そのような日常生活において当たり前環境を守る行動は、人間形成にどのような影響を及ぼすのであろうか。特に環境問題という概念そのものを持ち合わせていない幼児や小学校低学年はそれを当り前の行動と吸収しているのであれば、今後の環境破壊を止める大きな要因になるのではないだろうか。そのような子どもたちが成長し、やがて社会を支える世代になったとき、自然と共生する社会、自然の蘇生を待てる経済発展という持続可能な社会となるのではないだろうか。そこで、本研究では親の行動が子供の環境に対する知識に影響を与えるという仮説のもと、親にはアンケート調査を通し、子供には環境クイズを実施して、環境負荷削減行為と子供の環境に対する知識との関係を検討することにした。

2. 環境教育の研究の現状

環境教育の現状は、さまざまであり、教科として位置づけを持たないため、現場の教師の力量によって大きく左右されている。幼児・小学校低学年の環境教育の中心は、自然体験や植物の成長など命をテーマにしたものが大半である。そのため、教科となっている生活と混同しやすい。

降旗真一教授他¹⁾、環境教育の立場から見た自然体験学習は次のような展望のもとに展開されることが期待される、として3つの事柄について指摘をしている。

1. 青少年育成における自然体験学習と学力形成との関係の明確化。

環境教育が、教科としての位置付けを持っていれば、このような必要はなくなる。

2. 自然体験学習の指導者の再検討。

自然体験学習の指導者を、自然と人との応答的關係を仲介できる通訳者と捉えて、その養成のあり方を検討することである、と論文では解説されている。自然学習は単なる知識だけで指導することはできない分野であり、体験を通して得た自然に対する理解が必要である。指導者が自然保護を含めた環境問題に対して無関心では、自然との通訳者にはなれないであろう。

3. 自然と人の共生の地域づくり、持続可能な地域づくりに寄与する自然体験学習の展開。

自然学習の成果は、教科のように点数で学習の成果を得るものではない。自然学習がどのように実際に役立ったのかを検証するならば、地域にある問題解決に寄与することが最も身近ではないだろうか。

学校教育における自然学習は、教科としての位置づけを確立し教科書を整備するべきである。それができれば、指導者の育成方法も確立して行く。そして、環境教育はいずれ机に向かう学習を

超えて、地域の環境浄化へと発展していくというのが望ましい。

幼児期の環境教育研究については、大阪大谷大学の井上美智子教授²によると国内の研究においては、日本環境教育学会の学会誌「環境教育」に掲載されたものは9種で幼児の環境教育のあり方について議論を展開した文献が意外に少ない。しかも大学紀要等に掲載されたものが多く、先行文献への言及がなく自ら主張を展開するだけのものが多い、と云われている。継続研究が少なく、幼児期の環境教育という課題が一過性の関心対象でしかなかった。結果として、幼児期の環境教育についての理論的言説は、発展的議論がなされず、現場に影響力をもたなかったとした。この状況は現在もほとんど変わっていない。国内外ともに幼児期の環境教育は、自然体験が重要、自然体験だけでなく生活体験も含めた生活全体での取り組みが必要という二つに大別できた。環境教育が環境問題を解決するための環境保全を目的とするなら、幼児期の役割は自然体験以外にとらえようがない。しかし、環境教育を持続可能な社会を形成するための教育とするなら、環境とかわりながら発達し、そのかわりの総体によって環境のとらえ方の基盤が形成される幼児期の環境教育は、自然とのかかわりだけでなく生活全体で考えるべきとなる。井上は次のように環境教育の定義を示した。「幼児期の発達理解を元に、子供の主体的な遊びを重視しながら、持続可能な社会形成につながる環境観を形成する営み」である。

全体を通して低年齢の子供に対する環境教育は研究が遅れている現状が読み取れる。幼児にとって環境という概念を理解することは困難である。井上の定義にある「主体的な遊び」という範疇に環境が入れば、環境意識を備えた人間として成長することができる。そこで主体的な遊びを「お手伝い」と置き換えてみてはどうだろうか。そして、

その行為を褒めることにより、環境負荷削減行為は子供の意識の奥深くに浸透していくであろう。

井上が最後に定義した後半部分の「持続可能な社会形成につながる環境観を形成する営み」の中の環境観を生み出すのが、親の環境負荷削減行為ではないであろうか。本研究において、それを検証できれば、幼児環境教育の研究に貢献できるのではないかと考える。

3. 親の行動と子供の環境知識

本研究は「幼児期や小学校低学年の子どもを持つ親の日常生活での環境負荷削減行為が自然と子供の環境に対する知識を身につける要因である」と仮説を立て、それを証明することを目的としている。従来の先行研究は、それを検証するような手法でおこなわれてこなかった。そこで本研究では、それを補うために、親の環境負荷削減行為と子どもの環境知識を関連させ、調査することにした。

今や環境問題と云う難題が存在していることは多くの人々が認識している。但し、それが行動と結びついているかと云うと、そうではない。たとえば環境保護のために近距離には、徒歩や自転車で行くと決めて行動していても、雨が降る、寒い、荷物があるなどの状況が変化することによって、環境保護より、個人的な都合を優先して行動してしまいがちである。

その原因は、環境問題を知識で理解しているためではないだろうか。もし、環境負荷削減行為が習慣として身につけていけば、環境保護を最優先とする行動へ変わる。そのため、本研究では環境保護という概念を持たない幼児や小学校低学年を調査の対象として、親の環境負荷削減行為をどのように吸収しているのか調べることにした。

また、親の年齢、収入などの属性が環境意識と

2 井上美智子「幼児期の環境教育研究をめぐる背景と課題」『環境教育 19号』95p-108p、2009年7月、日本環境教育学会、95頁-108頁

大いに関係して、それが子供に与えている影響があると考えられる。なぜなら、環境に配慮する生活をするには、省エネ製品や再生可能な素材でできた製品の選択、また、食糧品では無農薬や有機栽培などの購入はコストが高くつくことが多い。3R運動に代表される環境対策行動は面倒であったり、手間がかかることが多く、自己抑制を必要とする。自己を抑制する能力は年齢に関係し、コスト高は収入に関わるなど、親の属性が生活に与える影響は大きい。そのため、親の属性と子供に備わった環境知識との関係からそれらを検証する。

その他、親の意識と子供の環境クイズの正解率との関係、親の属性と親の環境意識などの分析も合わせておこない、因果関係を見出し仮説の立証に役立てデータ全体から仮説を検証する。検証するために主に以下のような項目の調査をおこなった。

- ①親の環境問題の意識調査と環境クイズの正解数
- ②親の属性と環境クイズの正解数
- ③親の環境負荷削減行為と環境クイズの正解数
- ④環境教育の機会と環境クイズの正解数

4. アンケート調査結果とその分析

今回の社会調査は、大人にはアンケート(資料2)による調査を行い、その子供には環境クイズ(資料3)をテスト形式で回答を得た。対象者は幼児教室に通う539名の保護者とその子どもを対象とした。

調査は全国24か所の幼児教室で2010年6月1日～6月31日におこなった。保護者のアンケートは、59項目の環境に関する質問と属性および子供に関する質問で構成されている。子供の環境クイズは10問で構成し、幼児教室において授業の中で実施した。親子の関係を把握するため、保護者用のアンケートと環境クイズは通し番号で親子の関係を管理したことがこの調査の大きな特徴である。

なお、子供の年齢と性別については、回答用紙に記入する方法でデータを収集した(表1)。全国に配布した数は1,000通で、回収率は53.9%であった。

表1 子どもの年齢と性別

年齢	性別		合計
	男	女	
4歳	62	42	104
5歳	72	67	139
6歳	48	40	88
7歳	67	52	119
8歳	23	20	43
無回答			46
合計	275	225	539

4.1 アンケートに答えた親の属性

親の性別については、回答者の92.2%が女性(主に母親)であった。親の年齢については、もっとも多い層が35～39歳で43.4%、次いで40歳～39.1%、30～34歳が15.2%で、30歳以上で97.7%を占めた。アンケートに答えた人の職業は、無職が45.3%、雇用者が28.9%であったのは、回答者が子育て世代の女性が多かったためと思われる。配偶者の職業は雇用者60.1%であり、次に多かったのが自営業主26.7%という結果であった。アンケートに答えた親の最終学歴は、大学・大学院卒で43.1%、短期大学・専門学校卒が41.3%で、この二つで84.4%を占めた。また、配偶者(主に父親)は、大学・大学院卒で61%、短大専門学校卒が16%であった。世帯の年収については、もっとも多い層は年収700万円～1000万円で、回答を得た方での率は31.6%、次に500万円～700万円が26.7%、1000万円～1500万円と1500万円を超える層を足すと、29.5%という結果になった(資料1参照)。

環境問題の意識調査では、意識している14.3%、どちらかという意識している60.9%で、肯定的な回答をした人の合計は75.5%となった(表2)。

表2 環境意識アンケートのQ1の全体回答集計

値	カテゴリー	度数	率
5	意識している	77	14.3%
4	どちらかという意識している	328	60.9%
3	どちらともいえない	110	20.4%
2	どちらかという意識していない	21	3.9%
1	意識していない	1	0.2%
	無回答	2	0.4%
	合計	539	100%

また、それらの人がどのような環境問題に対して関心があるのかを調べた。一番多かったのは地球温暖化・気候変動であった。次に多かったのは、大気汚染・水質汚濁・土壌汚染問題となった。最も関心のある環境問題はという問いかけであったが、複数回答も多く全体の22.2%を占めた。環境問題を意識したきっかけと子供を持ったこととの関わりについては、71.8%の人々が肯定的回答をした。環境問題と出産は大きな関係があると言える。50年後の地球環境に対しては、83.5%の人が悪化する・やや悪化すると答え、現状より良くなると答えた人は、13.7%に留まった。多くの人が今のままでは環境破壊は抑えられないと感じているようだ。

また、環境改善の方法として環境教育の有効性を尋ねると、96.3%の方が肯定的回答であった。有効ではないと答えた人は少数であった。環境教育の実践については、家庭内で学ぶ機会を持つ家庭は47.5%であった。また、どちらともいえないという回答が32%もあり、家庭内での教育としての判断基準が難しかったようだ。家庭外で学ぶ機会を持っている家庭は全体の49.4%となり、家庭内とほぼ同じ結果となった。親子での自然との触れ合いについてはよくあるが27.9%、ときどきあるが58.3%で、86.2%の家庭が自然とのふれあいの場を持つ生活をしてきた。

親の育った家庭で環境問題に配慮していたかどうかという問いに対して、肯定的回答は38.2%と約4割弱の家庭が環境を意識した家庭で育っているということが明らかになった。親自身の環境教

育の実践については、環境に関わるワークショップへの参加経験の有無で調べた。参加経験者は、17.6%と低い結果となった。親の環境知識の度合いを調べる3R運動について尋ねると、知っている人は39.7%で、半数を下回った。地産地消の言葉の意味を知っている人は49.4%、ある程度知っている人は15.8%で、合計すると66%となり3R運動よりは認知度が高かった。

43項目の環境保護行為を、どの程度、行っているかについての結果を表3にまとめた。

生活に密着した環境保護行動は、いずれも肯定的回答が高い数値を示した。反面、カーボンオフセット・フェアトレードなどの専門用語については、子育て世代の母親には周知できていないようだ。子育てに忙しいようで、環境保護団体への参加や寄付という積極的な行動はほとんど行われていない。

子供に実施した環境クイズの結果について記述する。環境クイズは幼児にも理解できるように、言語と非言語を組み合わせたものを制作した。環境に関するクイズは全部で10問とした。回答数は539名あった。回答方法は2～5者選択方式にした。結果は以下の通りである。クイズ1の正解者は384名・正解率は73.8%、クイズ2の正解者は284名・正解率54.6%、クイズ3の正解者は506名・正解率は97.3%、クイズ4の正解者は169名・正解率は32.5%、クイズ5の正解者は274名・正解率は52.7%、クイズ6の正解者は192名・正解率は37.1%、クイズ7の正解者は307名・正解率は59.2%、クイズ8の正解者は206名・正解率は39.8%、クイズ9の正解者は192名・正解率は37.1%、クイズ10の正解者は219名・正解率は42.3%であった。最も正解率が高かったのはクイズ3で、ペットボトルのリサイクルは子どもに定着していると言える。また、正解率が最も低かったのはクイズ4で32.5%となった。全問正解者は2名、9問正解者27名、8問正解者54名、7問正解者

表3 親の環境保護行為

	積極的に 行う	どちらかと いうと行う	どちらでも ない	どちらかとい うと行わない	全く 行わない	該当しない・ わからない
1) 省包装の商品を選ぶ	25.9	39.5	25.3	6.1	1.7	1.5
2) エコバッグなどの買い物袋を持ち歩く	55.8	25.8	8.5	5.6	3.5	0.7
3) 水筒を持ち歩く	47.3	33.8	11.1	4.6	2.8	2.0
4) 使い捨て商品を買わない	6.7	39.2	41.9	10.4	6.0	2.0
5) 環境にやさしい商品を選ぶ	20.4	46.7	26.4	5.0	0.6	0.9
6) リサイクル品を選ぶ	7.9	26.5	43.9	15.9	4.7	1.1
7) 有機農産物や減農薬農産物を買う	35.7	39.2	18.6	5.2	0.4	0.9
8) 季節にあった食材を選ぶ	48.1	41.3	9.1	0.6	0.7	0.2
9) 近くで生産されたものを選ぶ	35.6	32.1	25.0	5.4	0.7	1.1
10) 環境問題に取り組んでいる企業の商品を買う	8.2	23.3	52.8	9.3	2.6	3.7
11) カーボン・オフセットつきの商品を買う	2.4	13.0	45.0	15.3	4.1	20.2
12) フェアトレード商品を買う	3.2	11.2	41.6	11.6	5.1	27.3
13) リサイクルや分別収集に協力する	63.1	31.8	3.0	1.7	0.4	0.0
14) 風呂の残り湯を洗濯に使い回す	45.7	9.7	8.0	9.3	25.2	2.1
15) 入浴は間隔をあけずに入る	35.3	32.3	17.5	9.5	4.3	1.1
16) シャワーを流しっぱなしにしない	49.3	32.2	11.0	5.2	1.5	0.7
17) てんぷら油や食べかすを排水口から流さない	86.6	8.9	3.2	0.0	0.7	0.6
18) 使っていない部屋の照明を消す	76.6	17.4	3.3	1.7	0.6	0.4
19) テレビをつけっぱなしにしない	63.5	25.1	7.1	3.4	0.7	0.2
20) 電化製品の主電源を切って待機電力を節約する	30.4	27.8	17.4	12.8	11.1	0.4
21) 冷蔵庫の扉を開けている時間を短くする	51.3	33.6	11.3	2.6	0.9	0.2
22) 冷蔵庫にものを詰め込みすぎない	36.4	34.3	19.5	7.2	2.4	0.2
23) 夏の冷房時の設定温度を28℃に設定する	30.9	27.7	24.5	10.0	4.3	2.6
24) 冬の暖房時の設定温度を20℃に設定する	28.6	26.2	23.4	13.0	6.1	2.6
25) 省エネルギー型の電化製品を選ぶ	50.1	39.3	8.7	1.1	0.4	0.4
26) 地域の清掃活動に参加する	28.8	29.9	24.1	9.5	5.0	2.8
27) 不用品をバザーに出したり寄付したりする	29.4	36.2	22.7	6.7	3.9	1.1
28) 家族で自然に触れ合う場所に行く	33.8	41.6	19.5	3.9	0.9	0.2
29) お花や野菜づくりなどガーデニングをする	30.1	30.2	19.5	10.8	8.0	1.5
30) 外出時のごみは持ち帰る	50.8	29.6	14.5	3.5	0.9	0.6
31) 環境家計簿をつける	1.9	2.4	16.5	14.3	52.5	12.4
32) 環境保護団体に寄付をする	2.6	8.0	20.6	17.1	43.1	8.6
33) 環境保護活動に参加する	2.2	6.2	22.2	18.8	42.7	7.8
34) 生活騒音の防止に努める	22.6	39.7	26.9	5.4	3.9	1.5
35) 近くには徒歩や自転車で行く	34.4	29.7	20.1	10.0	5.4	0.4
36) 自動車を使わず、公共交通を利用する	11.9	16.3	29.7	24.5	16.1	1.5
37) 自動車を運転する時はエコドライブを意識する	20.1	30.7	28.1	8.9	5.0	7.1
38) 自動車を買う際は低排出ガス車を選ぶ	33.0	26.9	23.2	4.6	4.8	7.4
39) エネルギー効率の良い給湯器を設置する	27.1	16.0	27.2	6.3	8.0	15.3
40) 住宅の屋根などに太陽光電池を設置する	9.1	3.5	21.9	10.0	32.1	23.4
41) 家庭用燃料電池を導入する	3.7	4.9	23.2	11.4	32.0	24.7
42) 屋上緑化を導入する	2.0	3.4	20.1	9.7	39.1	25.7
43) 二重サッシや断熱材を導入する	31.7	12.6	14.1	7.1	16.0	18.6

単位は%

107名、6問正解者124名、5問正解者101名、4問正解者81名、3問正解者34名、2問正解者6名、1問正解者2名となり、全問不正解者はいなかった。

4.2 親の環境意識と環境クイズの正解数の関係

親の環境意識(Q1)を独立変数として、その子供の「かんきょうクイズ」の正解数に差が出るかを調査・分析した。変数を、どちらかという肯定的回答「意識している+どちらかという意識している(1+2)」、どちらともいえない(3)、どちらかという否定的回答「どちらかという意識していない+意識していない(4+5)」の3つに分類して分析をおこなった。

親の環境意識(Q1)と子どもの正解数平均で見ると、肯定的回答「意識している+どちらかという意識している(1+2)」が5.9、どちらともいえない(3)が5.6、否定的回答「どちらかという意識していない+意識していない(4+5)」が5.3となって、こちらも右肩下がりの傾向を示したが、偏差値では「4+5」のバラツキがやや大きい。さらに、3つの変数の分類した親の環境意識でもって分散分析をした結果、 $P=0.089$ とわずかに有意確率0.05を上回り「有意差なし」となった。傾向的には親の環境意識が低いほど子供の正解数が少なくなっているが、有意差検定では子供の正解数に影響は無いと判定された。

4.3 親の属性と環境クイズの正解数の関係

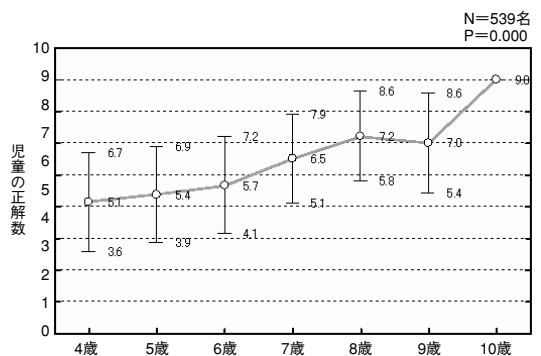
アンケートF1～F6の親の属性(F1.性別・F2.年齢・F3-1.職業・F3-2.配偶者の職業・F4.学歴・F5.配偶者の学歴・F6.世帯の年収)を変数として、その子供の「かんきょうクイズ」の正解数に差が出るかを調査・分析した。分析方法は、変数が2つ以上あるため「分散分析」を中心で行い、平均値と偏差を調べた。回答者は、親と関連させて総計539

名としている。

親の性別による子供の正解数の傾向については男親の子供の正解数の平均は6.0、女親の子供は5.8とほぼ同値となった。親の性別を変数として分散分析をした結果、 $P=0.598$ で有意確率0.05を上回り「有意差なし」となった。親の性別では子供の正解数に差は出ないことが分かった。

親の年齢による子供の正解数の傾向について、子供の正解数平均がもっとも高い親の年齢は40歳～以上で6.1、次いで35歳～39歳の5.8と続いている。親の年齢が低いほど子どもの正解数平均も下がっている。次に、親の年齢を5つの変数に分けて分散分析をした結果、 $P=0.006$ となって有意確率0.01をも下回り「有意水準1%でさわめて有意差あり」となった。親の年齢が子供の正解数に影響があることが分かる。子供の年齢が上がっていくことによって正解数の平均も増加していく傾向が見られた(図1)。このことから、親の高年齢化と子供の高年齢化とは相関が強いことが要因の一つとも考えられる。

図1 親の年齢による子供の正解数



(注：図のばらつきは標準偏差を示す。)

アンケートに答えた親(主に母親)の職業による子供の正解数の傾向について、親の職業と子供の正解数平均との関係を見ると「雇用者」が6.0、「自営業主」が5.9、「無職」が5.8、「家族従業者」が5.7で

あった。職業による違いはほとんど無いものと思われる。次に、親の職業を4つの変数に分け分散分析をした結果、 $P=0.421$ となって有意確率0.05を上回り「有意差なし」となった。親の職業は子供の正解数に影響は無いと云える。

親の配偶者(主に父親)の職業による子供の正解数の傾向について、親の配偶者の職業と子供の正解数平均との関係を見ると「自営業主」が5.6、「家族従業者」が5.7、「雇用者」が5.9、「無職」が6.0、「配偶者なし」が6.3であった。次に、親の配偶者の職業を5つの変数に分け分散分析をした結果、 $P=0.474$ となって有意確率0.05を上回り「有意差なし」となった。親の配偶者の職業は子供の正解数に影響は無いと思われる。

アンケートに答えた親(女性が92.2%)の最終学歴による子供の正解数の傾向について、親の最終学歴と子供の正解数平均との関係を見ると、「高等学校卒」が5.8、「短期大学・専門学校卒」が5.8、「大学卒」が5.7、「大学院卒」が5.8となった。中学校卒は回答者が1名のため対象からはずして分析した。次に、中学校卒を除いた親の最終学歴を4つの変数に分け分散分析をした結果、 $P=0.986$ となり有意確率0.05を上回り「有意差なし」となった。親の最終学歴は子供の正解数に影響は無いと云える。

アンケートに答えた親の配偶者の最終学歴による子供の正解数の傾向について、親の配偶者の最終学歴と子供の正解数平均との関係を見ると「中学校卒」が4.6、「高等学校卒」が5.5、「短期大学・専門学校卒」が5.8、「大学卒」が5.9、「大学院卒」が5.6となった。グラフからは高学歴ほど子供の正解数が高くなっているように見える。次に、中学校卒を含めた5つの変数を用い分散分析をした結果、 $P=0.189$ となり有意確率0.05を上回り「有意差なし」となった。親の配偶者の最終学歴も子供の正解数に影響は無いと云える。ただ、アンケートに答えた親(主に母親)の最終学歴のP値と比較すると、明

らかに親の配偶者の最終学歴の方が低い値をとっている。したがって、親の配偶者の最終学歴の方が、わずかながらでも変数間でなんらかの傾向があるということが読み取れる。

世帯の年収による子供の正解数の傾向について、世帯の年収と子供の正解数平均との関係を見ると、「300万円未満」が5.2、「300～500万円未満」が5.2、「500～700万円未満」が5.9、「700～1000万円未満」が5.7、「1000～1500万円未満」が5.6、「1500万円以上」が5.7となった。次に、世帯の年収を6つの変数に分け分散分析をした結果、 $P=0.423$ となり有意確率0.05を上回り「有意差なし」となった。世帯の年収では子供の正解数に影響は無いと云える。

この調査で親の属性が、仮説を証明する説明力はないと言える。

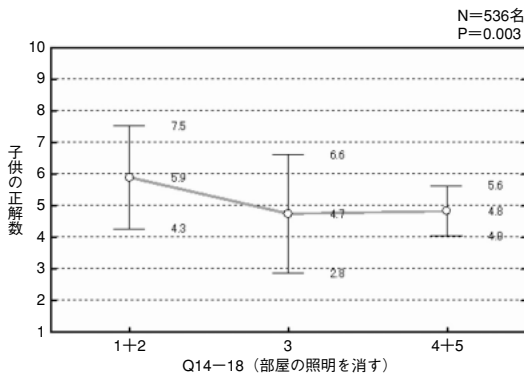
4.4 親の環境負荷削減行為と環境クイズの正解数の関係

親の環境負荷削減行動と子供の環境クイズの正解率とどのように関係しているかについて、検討してみた。環境負荷削減行動はQ14の43項目としその中で相関が強い項目は、Q14_第18項目「使っていない部屋の照明を消す」、Q14_第19項目「テレビをつけっぱなしにしない」、Q14_第20項目「電化製品の主電源を切って待機電力を節約する」、Q14_第23項目「夏の冷房時の設定温度を28℃に設定する」、Q14_第24項目「冬の暖房時の設定温度を20℃に設定する」、Q14_第25項目「省エネルギー型の電化製品を選ぶ」、14_第29項目「お花や野菜作りなどガーデニングをする」の7設問であった。積極的に行動を起こしている人の子供の正解数が高い傾向が出ている。

次に相関行列にて強い相関があった7設問の散布図と平均値の傾向と分散分析を試みた。相関行列にて強い相関が見られたQ14_第23項目、Q14_第24項目、Q14_第25項目、Q14_第29項目の4設

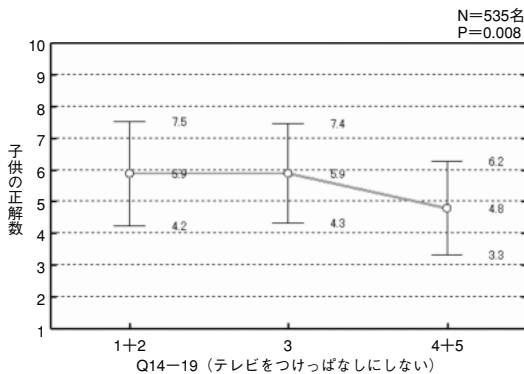
問は分散分析では、有意確率0.05を上回っているため「有意差なし」と判定された。Q14_第18項目「使っていない部屋の照明を消す」(図2)Q14_第19項目「テレビをつけっぱなしにしない」(図3)、Q14_第20項目「電化製品の主電源を切って待機電力を節約する」(図4)の3設問を積極的に行っている親(家庭)の子どもは正解数が高くなる傾向が鮮明にあらわれている。

図2 分散分析によって示される子供の正解数と「使っていない部屋の照明を消す」質問Q14_第18項目の平均値



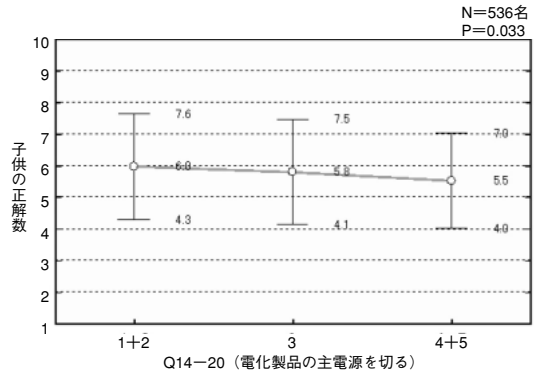
1+2=肯定的回答 3=どちらともいえない
4+5=否定的回答
(注：図のばらつきは標準偏差を示す。)

図3 分散分析によって示される子供の正解数と「テレビをつけっぱなしにしない」質問Q14_第19項目の平均値



1+2=肯定的回答 3=どちらともいえない
4+5=否定的回答
(注：図のばらつきは標準偏差を示す。)

図4 分散分析によって示される子供の正解数と「電化製品の主電源を切って待機電力を節約する」質問Q14_第20項目の平均値



1+2=肯定的回答 3=どちらともいえない
4+5=否定的回答
(注：図のばらつきは標準偏差を示す。)

4.5 子供の環境に対する教育を受ける機会と環境クイズの正解数の関係

(Q4～Q12)の設問と環境クイズの関係性を調査した結果を述べる。親の育った環境や行動「(Q4～Q12)」に対する回答と、その子供の「かんきょうクイズ」の正解数との間の相関関係を分析、無相関の検定で有意差が認められた項目のみを取り出し、詳細な分析を行った。分析方法は、「肯定的回答(1+2)、どちらともいえない(3)、否定的回答(4+5)」の3変数でもって「分散分析」を行った。

子供の正解数と親の育った環境や行動(Q4～Q12)間の相関と分散分析の結果、親の育った環境や行動(Q4～Q12)間と子供の正解数との相関関係は、Q6「お子さまは、家庭で、環境問題に対して学ぶ機会を持っていますか。」とQ7「お子さまは、家庭外で、環境問題に対して学ぶ機会を持っていますか。」の2設問が子どもの正解数との間で強い相関が見られた(表4)。どちらの設問も学ぶ機会を持っている子供は正解数が高くなる傾向がある。

表4 子供の正解数と親の育った環境と行動
単相関

	Q.4	Q.5	Q.6	Q.7	Q.8	Q.9	Q.10	Q.11	Q.12
子供の正解数との相関係数	0.021	-0.027	-0.177	-0.118	-0.045	-0.045	-0.048	-0.079	-0.079
回答者数	532	536	536	535	537	536	532	523	529
有意差判定			**	**					

(判定)**:1%有意、*:5%有意

子供が家庭内と家庭外で環境問題について学ぶ機会を持たせているかどうかの設問Q6、Q7に対して、環境保護のための行動に関する設問Q14の中で、特に、子供のかんきょうクイズの結果と強い関連があったQ14_第18項目、Q14_第19項目、Q14_第20項目の3項目とに関連が見られるかどうかを相関分析にて検定を行った。Q6とQ7に対してQ14_第18項目、Q14_第19項目、Q14_第20項目がどのように関連があるかを単相関分析にて実施し、表5の結果が得られた。有意差検定を見るとQ7よりもQ6との関連が強くあらわれている。家庭内で子供に環境問題を学ばせる機会を多く作っている人ほど、Q14_第18項目「使っていない部屋の照明を消す」、Q14_第19項目「テレビをつけばなしにしない」、Q14_第20項目「電化製品の主電源を切って待機電力を節約する」を積極的に行動する傾向がある。Q7の組み合わせの中では、唯一有意水準5%で有意となったのはQ14_第20項目であった(表5)。

環境保護のための日常行動を積極的にとっている人は、家庭内で子供に学ばせる機会を多く作るという傾向がある。

表5 家庭内・家庭外で環境に対する学習の機会の有無とQ14_第18項目・Q14_第19項目・Q14_第20項目との単相関

	単相関 n=530名		
	Q.14-18	Q.14-19	Q.14-20
Q6	** -0.119	** -0.1324	** -0.1846
Q7	-0.0457	-0.058	* -0.0924

(判定)**:1%有意、*:5%有意

4.6 家庭内での環境教育の機会の有無と親の属性の関係(表6参照)

まず、性別とQ6.家庭内で環境を学ぶ機会の有無のクロス集計においては、どちらかという肯定的な回答は男性が47.6%、女性が47.3%と男女ともほぼ半数弱となっている。

年齢とQ6.家庭内で環境を学ぶ機会の有無のクロス分析では、どちらかという肯定的な回答は25～29歳が37.5%、40歳以上が55.0%となり、年齢が上がるほど肯定的回答が増加していく傾向がみられる。この差について4変量で分散分析を試みた。算出したP値は0.048で、有意確率0.05よりも小さいため、4変量間には「有意水準5%で有意差あり」となった。高年齢ほど環境問題に対して家庭内で子供に学ばせる機会を持つ人が多くなる傾向が見られる。

アンケートに答えた親の職業別とQ6.家庭内で環境を学ぶ機会の有無のクロス集計においては、どちらかという肯定的な回答は自営業主が65.7%ともっとも多い。続いて、家族従業者、雇用の順となっている。

配偶者の親の職業別とQ6.家庭内で環境を学ぶ機会の有無のクロス集計においては、どちらかという肯定的な回答は配偶者なしが63.7%ともっとも多く、続いて自営業者の56.3%、雇用の43.2%の順となった。

アンケートに答えた親の最終学歴とQ6.家庭内で環境を学ぶ機会の有無のクロス集計においては、どちらかという肯定的な回答は高等学校卒が37.7%ともっとも少なく、大学院卒が53.3%となり、高学歴になるほど、肯定的回答が増加している。(中学卒は回答者が1名のため分析から除外した。)

分散分析では有意とはならなかったが、肯定的な回答のみでは、高学歴の方の割合が高くなっていく傾向が出ている。

配偶者の最終学歴とQ6家庭内で環境を学ぶ機会のクロス集計においては、どちらかという肯定的な回答は中学校卒が20%と最も少なく、次いで高等学校卒35.2%となり、短期大学・専門学校卒、大学卒、大学院卒が50%弱でほぼ拮抗している。

世帯の年収別とQ6家庭内で環境を学ぶ機会のクロス集計においては、どちらかという肯定的な回答は1000～1500万円未満と700～1000万円未満がともに52.9%でもっとも多く、逆に、もっとも少ない割合では300～500万円未満であった。

4.7 家庭外での環境教育の機会の有無と親の属性の関係(表6参照)

まず、性別と家庭外で環境を学ぶ機会の有無のクロス集計においては、どちらかという肯定的な回答は男性が40.5%、女性が49.9%で女性はほぼ半数で男性の割合を約9ポイント上回っている。

年齢と家庭外で環境を学ぶ機会のクロス集計においては、どちらかという肯定的な回答は25～29歳が37.5%、40歳以上が55.9%となり、年齢が上がるほど肯定的回答が増加していく傾向がみられる。この差について4変量で分散分析を試みた。算出したP値は0.019で、有意確率0.05よりも小さいため、4変量間には「有意水準5%で有意差あり」となった。高年齢の親は環境問題に対して家庭外でも子供に学ばせる機会を多く持つ傾向が見られる。

アンケートに答えた親の職業別と家庭外で環境を学ぶ機会のクロス集計においては、どちらかという肯定的な回答は家族従業者が55.9%でもっとも多い。続いて、自営業主、雇用者の順となっている。P値が有意確率に極めて近く、無職の肯定的回答の割合が牽引して有意に近い状態を作っ

ていると推定される。

配偶者の親の職業別と家庭外で環境を学ぶ機会のクロス集計においては、どちらかという肯定的な回答は自営業者が57.6%ともっとも多く、続いて家族従業者の48.0%、雇用者の47.2%の順となった。

アンケートに答えた親の最終学歴と家庭外で環境を学ぶ機会のクロス集計においては、どちらかという肯定的な回答は短期大学・専門学校卒が45.1%ともっとも少なく、大学院卒が53.4%ともっとも多い。(中学卒は回答者が1名のため分析から除外した。)分析では肯定的な回答のみでは、高学歴の方の割合が高い傾向が見られる。

配偶者の最終学歴と家庭外で環境を学ぶ機会の有無のクロス集計においては、どちらかという肯定的な回答は中学校卒が40%と最も少なく、次いで短期大学・専門学校卒41.9%となり、大学卒、高等学校卒、大学院卒が50%付近で拮抗している。

世帯の年収別と家庭外で環境を学ぶ機会の有無のクロス集計においては、どちらかという肯定的な回答は1500万円以上が62.8%でもっとも多く、次いで700～1000万円未満が55.4%、500～700万円未満が51.0%となり、逆にもっとも少ない割合は300万円未満となっている。分析では肯定的な回答のみの傾向は、年収の高い人ほど割合が高くなっている。以上がQ7家庭外において環境に対して学ぶ機会の有無と親の属性の分析結果である。

4.8 環境意識と親の属性の関係(表6参照)

環境意識と親の属性についての分析結果を示す。

①環境意識(Q1)と性別分析

クロス集計では、肯定的な回答は男性が80.8%、女性が74.7%となり、若干男性のほうが環境意識

は高い傾向がみられる。算出したP値は0.352と
なった。

②環境意識(Q1)と年齢別分析

クロス集計では、肯定的な回答は25～29歳が
62.5%、40歳以上が81.0%となり、年齢が上がるほ
ど肯定的回答が増加していく傾向がみられる。こ
の差について4変量で分散分析を試みた。算出し
たP値は0.039で、有意確率0.05よりも小さいため、
4変量間には「有意水準5%で有意差あり」となっ
た。高年齢ほど日ごろの環境問題を意識する傾向
がある。

③環境意識(Q1)と職業別分析

クロス集計では、肯定的な回答は自営業主が
82.8%ともっとも多い。それ以外の職業の肯定的
な回答はほとんど拮抗した割合である。

④環境意識(Q1)と配偶者の職業別分析

クロス集計では、肯定的な回答は雇用者が
76.2%ともっとも多く、続いて自営業者の73.6%、
配偶者なしの72.7%の順となった。

⑤環境意識(Q1)と最終学歴別分析

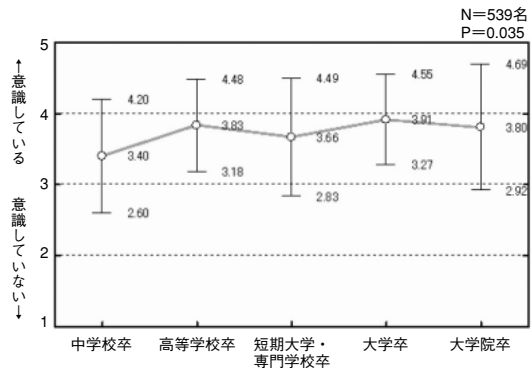
クロス集計では、どちらかという肯定的な
回答は高等学校卒が84.9%ともっとも多く、大学
院卒が60.0%となり、高学歴になるほど、肯定的
回答が減少していつている。この傾向について4
変量(中学卒は回答者が1名のため分析から除外し
た)で分散分析を試みた。算出したP値は0.882で、
有意確率0.05よりも大きいため、4変量間には「有
意差なし」という結果である。平均値の傾向では、
最終学歴間の差は認められなかった。

⑥環境意識(Q1)と配偶者の最終学歴別分析

クロス集計では、どちらかという肯定的な回
答は高等学校卒が77.5%、大学卒が78.0%でほぼ同
値、大学院卒が71.4%で続いている。この傾向に
ついて5変量で分散分析を試みた。算出したP値
は0.035で、有意確率0.05よりも小さいため、変
量間には「有意水準5%で有意差あり」となった。尺
度5の「意識している」の傾向が高学歴ほど増加し

ている傾向が、全体を底上げして、分析の差に繋
がったものと推察される(図5)。

図5 環境意識(Q1)と配偶者の最終学歴別分析



(注：図のばらつきは標準偏差を示す。)

⑦環境意識(Q1)と世帯の年収別分析

クロス集計では、肯定的な回答は1000～1500
万円未満が80.0%でもっとも多く、逆に300万円未
満(66.7%)や300～500万円未満(64.9%)は、もっ
とも少ない割合である。若干、年収が低いと肯定
的な回答割合が少なくなる傾向が見られた。

表6 親の属性と家庭内での環境教育(4-6)、家庭
外での環境教育(4-7)、環境意識(4-8)の関係

	4-6	4-7	4-8
性別	0.645	0.563	0.352
年齢	*0.048	*0.019	*0.039
親の職業	0.150	0.054	0.150
配偶者の職業	0.230	0.487	0.636
親の最終学歴	0.497	0.711	0.882
配偶者の最終学歴	0.194	0.840	*0.035
世帯の年収	0.360	0.106	0.245

(判定)**:1%有意、*:5%有意

5. 結論

以上の分析から親の環境意識と環境クイズの正
解数関係を分析した結果は、親の環境意識が高い
ほどクイズの正解率も高かったが、有意差検定で
は正解数に影響なしと判定された。よって親の環
境意識とクイズの正解数との間には、関係がない

ことがわかった。親の属性と環境クイズの正解数の関係の中で、唯一有意差ありとなったのは、親の年齢であった。親が高年齢になるほど、その子どもの年齢が高くなっていくため正解数が上がっていくようである。

環境負荷削減行為と子供の環境クイズの正解数の関係では、43項目中3つの行為、Q14_第18項目「使っていない部屋の照明を消す」、Q14_第19項目「テレビをつけっぱなしにしない」、Q14_第20項目「電化製品の主電源を切って待機電力を節約する」を積極的に行っている親(家庭)の子供は正解数が高くなる傾向が鮮明にあらわれた。仮説を立証する上で重要な結果となった。子供が環境に対する教育を受ける機会の有無と環境クイズの正解数の関係において結果として、家庭内・家庭外でも教育の機会を持つ子供の正解数は高くなる傾向が認められた。また、環境クイズと関連の強かった親の環境負荷削減行為Q14_第18項目「使っていない部屋の照明を消す」、Q14_第19項目「テレビをつけっぱなしにしない」、Q14_第20項目「電化製品の主電源を切って待機電力を節約する」の3つと子供が家庭内と家庭外で環境問題について学ぶ機会を持たせているかどうかの相関分析で、家庭内と家庭外で結果が異なった。3つの環境保護削減行為を積極的に行っている人は、家庭内で子どもに学ばせる機会を多く作るという傾向がみられ、仮説を証明する重要な結果が得られた。親の属性と子供が環境に対する教育を受ける機会の関係で、家庭内・家庭外とも、親が高年齢ほど環境問題に対して子どもに学ばせる機会を持つ人が多くなる傾向が見られた。環境意識と親の属性の関係では、親が高年齢ほど日ごろの環境問題を意識する傾向と配偶者の最終学歴に有意差ありとなった。

本研究の仮説で掲げた項目は大きく分けて2つにまとめられる。一つは本研究の中心である、「幼児期や小学校低学年の子供を持つ親の日常生活で

の環境負荷削減行為が自然と子供の環境に対する知識を身につける要因である」という項目である。二つ目が「親の属性が親の環境意識と関係し、それが子供の環境知識に影響」という項目である。

検証した結果を仮説と照らし合わせて検証した。一つ目の親の環境意識と環境負荷削減行為との関係を調べ、その関係が子供の環境知識に影響するという項目の検証では、親の環境意識が高いほど、環境負荷削減行為を積極的に行うことが確認され、その環境負荷削減行為の3つの項目と環境クイズの正解数と強い関係があることを統計分析上で証明できた。「使っていない部屋の照明を消す」、「テレビをつけっぱなしにしない」、「電化製品の主電源を切って待機電力を節約する」この3項目は43項目の中でも、日常的に子供が目にする行為であり、その行為を行なっている親の子どもは正解数が高くなる傾向が鮮明にあらわれたことにより、仮説は肯定された。

次に二つ目の親の属性が親の環境意識と関係し、それが子供の環境知識に影響するという項目の検証では、親の属性の中では、親の年齢が高いほど環境に対する意識が高いが、意識の高さは環境クイズの正解数とは有意差検定では影響なしと判定された。よって仮説で掲げた親の属性が環境意識に関係し、その関係が子供の環境知識に影響を与えているという仮説は本研究では肯定されなかった。

仮説になかったが環境教育について、親の年齢が高いほど、家庭内・家庭外で子供に環境に対する教育の場を与えていることがわかった。家庭内・家庭外で環境に対する教育の場を持つ子供の正解数は、高くなることも立証できた。環境教育が確実に実を結んでいる結果が証明された。以上のことから、子供の環境知識は、教育で増えるとも云えるし、親の環境負荷削減行為が影響しているとも云える。そこで、環境クイズと強い関係性

を示した「親の環境負荷削減行為3つ」と「家庭内で環境に対する教育を受ける機会の有無」と「家庭外で環境に対する教育を受ける機会の有無」との関係性を分析した。結果は前述の通り、3つの環境負荷削減行為は、家庭内で教育の機会を持つ子供と強い関係性を示し、家庭内で環境保護のための日常行動を積極的に行っている人は、家庭内で子供に学ばせる機会を多く作り、その結果として子供の環境知識が増えているということが判明した。家庭内での教育の機会とは特別な教育ではなく、なにげなく親がしている行為を子供が知識として吸収しているといえるのではないだろうか。以上の結果、「幼児期や小学校低学年の子どもを持つ親の日常生活での環境負荷削減行為が自然と子供の環境に対する知識を身につける要因である」という仮説は証明された。また同時に、家庭内・家庭外で環境教育を施すことにより、確実に子供の環境に対する知識が増えていることから、環境教育の重要性も同時に立証することができた。

6. おわりに

本研究を通じて、子供が日常的に目にする親の環境負荷削減行為が子供の環境に対する知識に影響を与えていたことと、環境教育が確実に子供の知識と関わっていることが証明された。このことは、持続可能な社会を築く上で、親の環境負荷削減行為が大きく役立つという証明と云える。

異常気象が顕著になり、先進国の環境意識は上がってきていることは間違いないが、発展途上国の経済活動も活発になってきている。経済とは、自然を資源にして発展していくものである以上、環境を破壊せずに暮らすことは、現代人にとっては、もはや不可能である。

そうであるなら、自然と共生していくという理念を明確に人類が持たなければならない。そして人間が自然と共生するとは、寄生しているという

ことを知る必要がある。寄生とは一緒に暮らしながら、片方だけが利益を受け、相手が被害を受けている状態を云う。この関係をしっかり知ることを、環境教育のスタートとするべきではないかと筆者は考える。私たちは自然という部屋に居候しながら、その部屋の壁や天井を壊している状態なのである。

私たちはこのようなことを日々行っていることを自覚し、少しでも日常生活で、自然に対して謙虚な姿勢で暮らしをすることを目指さなければならない。自然に対して謙虚な姿勢とは、自然に蘇生をする時間を与えると云うことである。それが、持続可能な社会を構築する条件ではないだろうか。その条件を満たすために、親は日常の生活の上で、環境に配慮した生活を心がけ、教育現場では環境教育を一日も早く教科としての位置づけをするべきと考える。

〈資料1〉

【親の性別について】

NO	性別	回答数	率
1	男性	42	7.8%
2	女性	497	92.2%
	無回答	0	0.0%
	総回答数	539	100%

【親の年齢について】

NO	年齢	回答数	率
1	～24歳	0	0.0%
2	25～29歳	8	1.5%
3	30～34歳	82	15.2%
4	35～39歳	234	43.4%
5	40歳～	211	39.1%
	無回答	4	0.7%
	総回答数	539	100%

【親の職業について】

NO	職業	回答数	率
1	自営業主	35	6.5%
2	家族従業者	93	17.3%
3	雇用者	156	28.9%
4	無職	244	45.3%
	無回答	11	2.0%
	総回答数	539	100%

【配偶者の職業について】

NO	職業	回答数	率
1	自営業主	144	26.7%
2	家族従業者	25	4.6%
3	雇用者	324	60.1%
4	無職	19	3.5%
5	配偶者なし	11	2.0%
	無回答	16	3.0%
	総回答数	539	100%

【親の最終学歴について】

NO	最終学歴	回答数	率
1	中学校卒	1	0.2%
2	高等学校卒	53	9.8%
3	短期大学・専門学校卒	222	41.2%
4	大学卒	217	40.3%
5	大学院卒	15	2.8%
	無回答	31	5.8%
	総回答数	539	100%

【配偶者の最終学歴について】

NO	最終学歴	回答数	率
1	中学校卒	5	0.9%
2	高等学校卒	71	13.2%
3	短期大学・専門学校卒	86	16.0%
4	大学卒	287	53.2%
5	大学院卒	42	7.8%
	無回答	48	8.9%
	総回答数	539	100%

【世帯の年収について】

NO	世帯年収	回答数	率
1	300万円以下	9	1.7%
2	300万円～500万円未満	37	6.9%
3	500万円～700万円未満	102	18.9%
4	700万円～1000万円未満	121	22.4%
5	1000万円～1500万円未満	70	13.0%
6	1500万円以上	43	8.0%
	無回答	157	29.1%
	総回答数	539	100%

《資料2》 保護者用のアンケート

環境意識調査への協力をお願い

充実した環境教育を今後行っていくために、保護者の皆さまに環境問題に関する意識や行動についてお聞きします。回答時間は約15分です。お忙しいところ恐縮ですが、回答に協力していただきますようお願い申し上げます。

- Q1. あなたは、日ごろどの程度、環境問題を意識していますか。
1. 意識している
 2. どちらかという意識している
 3. どちらともいえない
 4. どちらかという意識していない
 5. 意識していない
- Q2. Q1で「1. 意識している」「2. どちらかという意識している」と答えた方にお尋ねします。
あなたが、最も関心のある環境問題は何ですか。
1. 地球温暖化・気候変動
 2. オゾン層の破壊の問題
 3. 生態系問題
 4. 廃棄物問題
 5. 大気汚染・水質汚濁・土壌汚染問題
 6. その他
- Q3. Q1で「1. 意識している」「2. どちらかという意識している」と答えた方にお尋ねします。
あなたが、環境問題を意識したきっかけは、子供を持ったことに関係していますか。
1. 大きく関係している
 2. どちらかといえば関係している
 3. どちらともいえない
 4. どちらかといえば関係していない
 5. まったく関係していない
- Q4. 50年後の地球環境は、どうなっていると思いますか。
1. 悪化している
 2. やや悪化している
 3. 現状を維持している
 4. やや良くなっている
 5. 良くなっている
- Q5. 地球環境を改善する上で、環境教育は有効な手段だと思いますか？
1. 思う
 2. どちらかというと思う
 3. どちらともいえない
 4. どちらかというと思わない
 5. 思わない
- Q6. お子さまは、家庭で、環境問題に対して学ぶ機会を持っていますか。
1. 持っている
 2. どちらかというを持っている
 3. どちらともいえない
 4. どちらかというを持っていない
 5. 持っていない
- Q7. お子さまは、家庭外で、環境問題に対して学ぶ機会を持っていますか。
1. 持っている
 2. どちらかというを持っている
 3. どちらともいえない
 4. どちらかというを持っていない
 5. 持っていない

S. Okudoi, The Environmental Protection, Parental Influence

Q 8. 日ごろ、お子さまと共に、自然とふれあう機会がありますか。

1. よくある 2. ときどきある 3. どちらともいえない 4. あまりない
5. 全くない

Q 9. あなたの育った家庭は、どの程度、環境問題に配慮していましたか。

1. 配慮していた 2. どちらかといえば配慮していた 3. どちらともいえない
4. どちらかといえば配慮していなかった 5. まったく配慮してなかった

Q10. あなた、もしくは、配偶者は、環境に関わるワークショップやセミナーに参加したことがありますか。

1. ある(回) 2. ない

Q11. 3R運動をご存知ですか。

1. 知っている 2. ある程度知っている 3. あまり知らない 4. 全く知らない

Q12. 地産地消という言葉の意味を知っていますか。

1. 知っている 2. ある程度知っている 3. あまり知らない 4. 知らない

Q13. Q12で「1. 知っている」「2. ある程度知っている」と答えた人にお尋ねします。

地産地消と環境問題は、どのような関連があると思いますか。

Q14. 日ごろ、あなた自身、または、ご家族で、環境保護のために、以下の事柄をどの程度行っていますか。

1. 積極的に行う 2. どちらかというで行う 3. どちらでもない
4. どちらかというで行わない 5. 全く行わない 9. 該当しない・わからない

1) 省包装の商品を選ぶ	1	2	3	4	5	9
2) エコバッグなどの買い物袋を持ち歩く	1	2	3	4	5	9
3) 水筒を持ち歩く	1	2	3	4	5	9
4) 使い捨て商品を買わない	1	2	3	4	5	9
5) 環境にやさしい商品を選ぶ	1	2	3	4	5	9
6) リサイクル品を選ぶ	1	2	3	4	5	9
7) 有機農産物や減農薬農産物を買う	1	2	3	4	5	9
8) 季節にあった食材を選ぶ	1	2	3	4	5	9
9) 近くで生産されたものを選ぶ	1	2	3	4	5	9

10) 環境問題に取り組んでいる企業の商品を買う	1	2	3	4	5	9
11) カーボン・オフセットつきの商品を買う	1	2	3	4	5	9
12) フェアトレード商品を買う	1	2	3	4	5	9
13) リサイクルや分別収集に協力する	1	2	3	4	5	9
14) 風呂の残り湯を洗濯に使い回す	1	2	3	4	5	9
15) 入浴は間隔をあけずに入る	1	2	3	4	5	9
16) シャワーを流しっぱなしにしない	1	2	3	4	5	9
17) てんぷら油や食べかすを排水口から流さない	1	2	3	4	5	9
18) 使っていない部屋の照明を消す	1	2	3	4	5	9
19) テレビをつけっぱなしにしない	1	2	3	4	5	9
20) 電化製品の主電源を切って待機電力を節約する	1	2	3	4	5	9
21) 冷蔵庫の扉を開けている時間を短くする	1	2	3	4	5	9
22) 冷蔵庫にものを詰め込みすぎない	1	2	3	4	5	9
23) 夏の冷房時の設定温度を28℃に設定する	1	2	3	4	5	9
24) 冬の暖房時の設定温度を20℃に設定する	1	2	3	4	5	9
25) 省エネルギー型の電化製品を選ぶ	1	2	3	4	5	9
26) 地域の清掃活動に参加する	1	2	3	4	5	9
27) 不用品をバザーに出したり寄付したりする	1	2	3	4	5	9
28) 家族で自然に触れ合う場所に行く	1	2	3	4	5	9
29) お花や野菜づくりなどガーデニングをする	1	2	3	4	5	9
30) 外出時のごみは持ち帰る	1	2	3	4	5	9
31) 環境家計簿をつける	1	2	3	4	5	9
32) 環境保護団体に寄付をする	1	2	3	4	5	9
33) 環境保護活動に参加する	1	2	3	4	5	9
34) 生活騒音の防止に努める	1	2	3	4	5	9
35) 近くには徒歩や自転車で行く	1	2	3	4	5	9
36) 自動車を使わず、公共交通を利用する	1	2	3	4	5	9
37) 自動車を運転する時はエコドライブを意識する	1	2	3	4	5	9
38) 自動車を買う際は低排出ガス車を選ぶ	1	2	3	4	5	9
39) エネルギー効率の良い給湯器を設置する	1	2	3	4	5	9
40) 住宅の屋根などに太陽光電池を設置する	1	2	3	4	5	9
41) 家庭用燃料電池を導入する	1	2	3	4	5	9
42) 屋上緑化を導入する	1	2	3	4	5	9
43) 二重サッシや断熱材を導入する	1	2	3	4	5	9

Q15. 環境保護のために、Q14の他に積極的に行っていることは何ですか。

- Q16. 今後、あなたが取り組みたい環境保全対策は何ですか。
また、環境問題に対して、ご意見があればお聞かせください。

ここから、あなたとご家族についてお聞きします。

- F1. あなたの性別は。 1. 男 2. 女
- F2. あなたの年齢は満でいくつですか。
1. ~ 24歳 2. 25歳~ 29歳 3. 30歳~ 34歳 4. 35歳~ 39歳 5. 40歳~
- F3. あなたと配偶者の職業について教えてください。
【あなた】 1. 自営業主 2. 家族従業者 3. 雇用者 4. 無職
【配偶者】 1. 自営業主 2. 家族従業者 3. 雇用者 4. 無職 5. 配偶者なし
- F4. 差し支えなければお答えください。あなたの最終学歴はどれですか。
1. 中学校卒 2. 高等学校卒 3. 短期大学・専門学校卒 4. 大学卒 5. 大学院卒
- F5. 差し支えなければお答えください。あなたの配偶者の最終学歴はどれですか。
1. 中学校卒 2. 高等学校卒 3. 短期大学・専門学校卒 4. 大学卒 5. 大学院卒
- F6. 差し支えなければお答えください。あなたの世帯の年収はいくらですか。
1. 300万円未満 2. 300万円~ 500万円未満 3. 500万円~ 700万円未満
4. 700万円~ 1000万円未満 5. 1000万円~ 1500万円未満 6. 1500万円以上
- C1. 七田チャイルドアカデミーに入室されたのは、きっかけは何ですか。
1. 右脳教育に興味があった 2. 受験のため 3. 人に勧められて 4. 書籍を読んで
5. その他()
- C2. お子様に食べ物の好き嫌いはありますか。
1. ない 2. どちらかといえない 3. どちらともいえない
4. どちらかといえはある 5. ある

- C3. お教室でIQ検査をされた方は、お子様のIQ数値の番号に○をしてください。
(田中B式を実施された方のみご記入ください。複数回受けられた方は直近の数値をご記入ください。)
1. 100未満
 2. 100～110未満
 3. 110～120未満
 4. 120～130未満
 5. 130～140未満
 6. 140～150未満
 7. 150以上
- C4. お子様の就寝時間は何時ですか。
1. 20時以前
 2. 20時台
 3. 21時台
 4. 22時以降
- C5. お子様は平日の朝はどのように起きていますか。
1. 自分で起きてくる
 2. ときどき自分で起きる
 3. 目覚ましはセットしているが母親が毎回起こす
 4. 目覚ましをセットせずに毎回母親が起こす
- C6. お子様の毎朝朝食についてお尋ねします。
1. ほぼ毎朝食べる
 2. ときどき食べる
 3. ほとんど食べない
 4. 全く食べない
- C7. あなたのお子様は昆虫が好きですか、嫌いですか。
1. 好き
 2. どちらかというが好き
 3. どちらでもない
 4. どちらかという嫌い
 5. 嫌い

環境問題に対するご意見がありましたらどうぞ。

設問は以上です。ご協力、ありがとうございました。

《資料3》

かんきょうクイズ①

もんだい ① みんなが すっている くうきを よごす ものに ○を しましょう。



①なわとび ②だるま ③すべりだい ④くるま ⑤じてんしゃ

もんだい ② やねなどで みかける たいようでんちパネルは なにを つくる きかいですか。 うれしい ものに ○を つけましょう。



①ガス ②でんき ③ジュース ④アイスクリーム ⑤くうき

もんだい ③ つかい おわった ペットボトルは どうすれば よい ですか。 うれしい もんに ○を つけましょう。



①かわに すてる ②やまに うめる ③たきびで やく ④リサイクル かいしゅう ボックスに いれる

もんだい ④ きれいな かわに すんでいる いきものは どれ ですか。 うれしい もんに ○を つけましょう。



①アメリカザリガニ ②さわがに ③たにし

もんだい ⑤ わたしたちを まもって くれる 「オゾンそう」は どこに ありますか。 うれしい もんに ○を つけましょう。



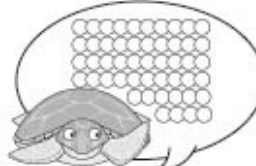
①じめんの した ②そらのうえ ③うみのなか

かんきょうクイズ②

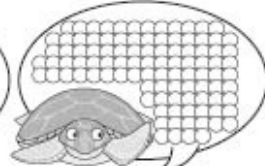
もんだい ⑥ あかみかめは、いちどになんこのたまごをうむでしょう。
ただしものに○をつけましょう。



①10こぐらい



②50こぐらい



③100こぐらい

もんだい ⑦ しぜんを まもるには どれが よい ですか。 だ だ しい もの に ○ を つ け ま し ょ う。



①スーパーまでくるまでいく



②スーパーまでじてんしゃでいく

もんだい ⑧ わた した ち が ひ と り い ち に ち に つ か う お み ず の り ょ う は 2 リ ッ ト ル ベ ッ ト ボ ト ル な ん ぼ ん ぐ ら い だ っ か。 だ だ しい もの に ○ を つ け ま し ょ う。



①10ぼん ぐらい



②60ぼん ぐらい



③120ぼん ぐらい

もんだい ⑨ あ き に あ か い ろ に か わ る 「は」 は だ れ だ っ か。 だ だ しい もの に ○ を つ け ま し ょ う。



①いちよう



②もみじ



③まつ

もんだい ⑩ い え の な か で つ か う み ず で い ち ぼ ん よ こ れ が お お い の は だ れ だ っ か。 だ だ しい もの に ○ を つ け ま し ょ う。



①ゆうしょくのあとかたづけのみず



②トイレのみず



③せんたくのみず